

『ボーダーの記憶－対馬・釜山・鎮海を巡る「砦」と「交流」の軌跡』

JCBS 会員 小林史武

境界を旅する－「砦」と「ゲートウェイ」の地政学

2025 年 10 月 24 日から 27 日、JIBSN 研修ツアーに参加し、対馬・釜山・そして鎮海を訪れた。

九州と朝鮮半島の上に浮かび、絶えず歴史の荒波に洗われ続けてきた「国境の島」、対馬。海峡を越えた先にあり、朝鮮半島南東端の活気ある「玄関口」、釜山。さらにその西隣、複雑な入江の奥に静まる港湾都市、鎮海。

この旅は、日本列島と大陸を繋ぐ重要かつ繊細な「国境（ボーダー）」の地政学を肌で感じるツーリズムであった。

「国境」とは、本質的に二つの顔を持つ。一つは他者の侵入を拒み、自領域を守る厳格な「砦」としての側面。もう一つは、異文化と出会い、人・モノ・情報が往来する「ゲートウェイ」としての側面である。

地理的に近すぎるがゆえの宿命を帯びたこの海域は、まさにその二重性を色濃く体現してきた場所だ。

今回の旅で、私たちはその「砦」の記憶と「ゲートウェイ」の痕跡を辿ることになった。机上の知識ではなく、その地に立つツーリズムだからこそ見えてくる、ボーダーが持つ「対立」と「交流」の相克の軌跡を、ここに記したい。

対馬の緊迫－釜山を望む「砦」の記憶

まず訪れた対馬は、その地理的条件が「国境」であることを否応なく突きつける場所だった。九州本土からよりも、朝鮮半島・釜山までの方が圧倒的に近い。わずか 50km 弱（博多からは約 140km）に位置し、晴れた日にはその街並みを望むことができるという「目と鼻の先」にあるこの島は、常に大陸との最前線であり続けた。

「ポサドニック号事件」の現場である大船越瀬戸にて松村安五郎・吉野数之助の顕彰碑を訪ね、浅茅湾を望んだ時、対馬が歴史的に背負ってきた「砦」としての宿命を強く感じた。幕末の 1861 年、ロシアの南下政策（不凍港の希求）を背景に、ロシア軍艦ポサドニック号が浅茅湾に来航し、半年にわたり滞留した事件である。対馬藩、ひいては幕府を巻き込んだ大騒動となり、最終的にはイギリスの介入によりロシア艦は退去したものの、大船越の瀬戸を強引に通過しようとしたロシア兵との争いにより悲劇が生まれた。松村安五郎は銃撃され死亡、吉野数之助は捕虜となり、その恥辱に耐えかねて自ら命を絶ったのである。

目の前に広がる穏やかな湾が、かつて他国の武力によって占拠され、国家主権が脅かされた「砦」の破綻の現場であったとは、俄かには信じ難い。しかしこの事件は、対馬という「砦」がいかに重要であり、同時に対外的な圧力に対していかに脆弱であったかを、幕末の日本に

痛感させた出来事であったろう。



<松村安五郎・吉野数之助の顕彰碑>



<浅茅湾>

また、対馬が「砦」として過酷な運命を辿った事例として、13 世紀の「元寇（文永・弘安の役）」も忘れてはならない。朝鮮半島を基地としたモンゴル（元）と高麗の連合軍は、日本侵攻の第一歩として対馬に上陸し、島は甚大な被害を受けた。さらに中世には、「倭寇」が朝鮮半島や中国沿岸を荒らし、対馬はその拠点の一つと見なされた歴史もある。

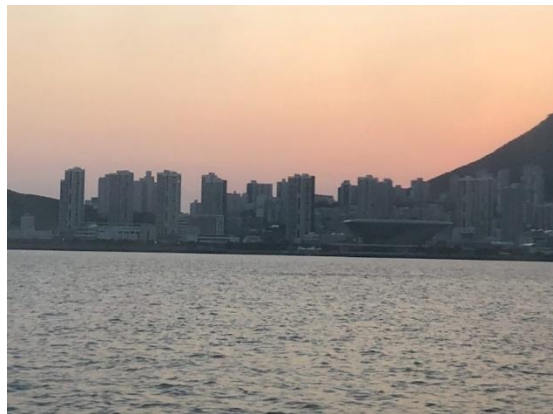
このツーリズムで目の当たりにした静かな海と、歴史的な緊迫感とのギャップこそ、常に「ボーダー」であり続けた対馬の現実なのであろう。

釜山の交流－朝鮮半島南東端の「ゲートウェイ」

今回のボーダーツアーでは、対馬北部の比田勝港から釜山港へ高速船で向かった。対馬海峡の波に揺られること約 1 時間 30 分。朝鮮半島の南東端に位置する韓国第 2 の都市、釜山に降り立つと、国境の様相は一変した。ここは古代から大陸と列島を結ぶ最大の港であり、対馬とは比較にならない規模の「ゲートウェイ」として機能してきた歴史を持つ。



<高速船「NOVA」>



<釜山港を望む>

私たちが訪れた龍頭山公園の麓は、かつて「ゲートウェイ」の最前線であった「倭館」が置かれた場所である。倭館とは、特に近世（江戸時代）においては、鎖国下の日本（対馬藩）が朝鮮王朝と国交を持つことを許された公的窓口であった。

釜山の倭館は、当初の富山浦から豆毛浦、そして1678年に現在の龍頭山公園周辺である草梁（チョリャン）へと移転し、約10万坪（東京ドーム7個分以上）とも言われる広大な敷地を持つに至った。

ここは対馬藩の役人や商人ら400～500人が常駐し、朝鮮との円滑な交易、朝鮮・中国に関する情報収集、外交文書の内容検査などを行なう、一種の「治外法権的租界」あるいは「対馬藩の出先機関」として機能していたのである。



<倭館の所在地（対馬博物館展示）>



<草梁倭館図（対馬博物館展示）>

ボーダーのプロフェッショナル ― 「交流」を支えた訳官使と朝鮮通信使

この「ゲートウェイ」を、朝鮮側で支えたのが、「訳官使」と呼ばれる通詞（通訳官）たちである。彼らは言語の壁を越え、日朝間の外交交渉、貿易実務、さらには対馬側の人々の監視や情報収集まで、あらゆる実務を担った。訳官使は朝鮮から対馬藩へ派遣される、実務的な性格の強い 100 人程度の小規模な使節団でもあった。

対馬で触れたボサドニック号事件の記憶が、武力によって国境を書き換えようとする「砦」の側面だとすれば、その対極にある「ゲートウェイ」を支えたのは、国境という最前線で交渉し続けた人間たちであり、その筆頭が、「訳官使」と呼ばれるプロフェッショナルであった。彼らの高度な実務能力と調整力があったからこそ、平和的な往来が維持されたのである。

そして、対馬藩と訳官使たちの調整の結果として実現したのが、「朝鮮通信使」であった。室町から江戸時代にかけて、朝鮮国王から日本の将軍へ派遣されたこの大規模な外交使節団は、300～500 人からなり、釜山を出発して対馬を経由し、江戸へと至る旅路を行進した。

訳官使と朝鮮通信使は、いずれも江戸時代に朝鮮から日本へ派遣された使節団だが、その目的、規模、派遣先などにおいて明確な違いがある。端的に言えば、朝鮮通信使は国家間の公式な外交使節団であり、訳官使は対馬藩との実務的な交渉を担った使節団であった。

私たちは歴史的な「交流」を振り返るとき、華やかな朝鮮通信使のような国家間の公式な外交使節団に注目しがちである。しかし、今回の旅で国境の緊張感（砦）を肌で感じたことで、その裏側で「ゲートウェイ」を閉じまいと奔走した訳官使と対馬藩との実務的な「交流」がいかに重要であったか、その重みを深く理解することができた。

鎮海の重層性 ― 湾奥に築かれた「砦」と「ゲート」

研修ツアー最終日、釜山から西へ向かった。リアス式海岸が天然の防壁をなす、湾の奥深くに位置する鎮海（チネ）である。この地が持つ「天然の良港」とであるという地理的特徴こそが、その後の近代史を大きく左右することになる。

鎮海は、対馬のボサドニック号事件で日本が脅威を感じたロシアの南下に対抗するため、大日本帝国海軍がその「地形」に着目して築き上げた巨大な軍事要港であった。つまり鎮海は近代的な「砦」として、それも自国の領土ではなく、他者の領域（当時は大韓帝国、のちに植民地）に建設されたのである。

これは、かつて豊臣秀吉の朝鮮出兵において日本がこの地域を「足掛かり」にした記憶とも重なる。鎮海は、防衛のための「砦」とであると同時に、大陸進出を狙う日本にとっては、朝鮮半島からさらに大陸へと進出するための「ゲートウェイ」でもあった。ただしそれは、倭館のような「交流」のためのゲートではなく、進出のための一方的な「ゲート」であったという、複雑な意味を持つ。

戦後、韓国海軍の重要拠点となった現在も、その地政学的な「砦」としての役割は変わらない。日本統治時代の近代建築や計画的に植えられた桜並木といった「負の遺産」とも言える風景と、現代韓国の軍港が同居する鎮海の街並み。それは、地理的条件がいかに「砦」や

「ゲート」としての役割を課し、その土地に複雑な歴史を刻み込むかを物語っていた。



<1910 年代の鎮海の街>



<現在の鎮海湾>

ボーダーの地政学とツーリズムが拓く視座

対馬（日朝の中間点）から釜山（朝鮮半島の玄関口）、そして鎮海（湾奥の要港）へ。この地理的連関を辿る JIBSN 研修ツアーは、国境（ボーダー）がいかに関その地政学的な条件によって「砦」と「ゲートウェイ」という二重の役割を課せられてきたかを、浮き彫りにした旅であった。

この旅で、私たちはボーダーが持つ多様な顔を見た。ある時は「砦」として武力で脅かされ（ポサドニック号事件）、またある時は「ゲートウェイ」として厳格な管理の下で対話と文化交流を試みた（倭館、訳官使、朝鮮通信使）。そしてその両方が近代の中で、ねじれた形で「砦」と「ゲート」として建設された（鎮海）。

歴史を振り返れば、人々は「近さ」ゆえに「砦」を高くすることに固執し、衝突を繰り返してきた。しかし同時に、「ゲートウェイ」を開くことで豊かさや文化を生み出そうとした先人たちの知恵と努力も確かに存在したのである。

このツーリズムを通じて、それらの歴史の痕跡が今も息づく「現場」に立ったからこそ、その重みを実感することができた。

未来に向けて、私たちはこの地理的宿命とも言えるボーダーを、再び「砦」として閉ざすのか、それとも「ゲートウェイ」として開き、「交流」を続けていくのか。その選択が今、私たち自身に問われている。

その答えを考えるための視座を、今回の旅は与えてくれたように思う。

人と人との交流が、国境という厳しい線に彩を加え、柔らかなグラデーションを描いていく可能性を信じたい。そのような想いを胸に、釜山から空路、成田への帰路についた。

最後になりますが、今回もこのような唯一無二の学びの場である JIBSN 研修ツアーを企画・立案・運営していただきました皆様に、深く感謝申し上げます。この貴重なボーダーツアーが今後も継続され、一人でも多くの方が「現場」に立ち、この思索の旅を共有されることを祈念し、結びと致します。